学校現場の熱中症に関する研究

森　崇人（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　谷川　尚己

キーワード：熱中症，学校現場

1. 緒言

近年，熱中症の患者数が増加してきている．熱中症は，高温の環境下で，体内の水分や塩分のバランスが崩れたり，体内の調整機能がうまく働かず，体温が著しく上昇するなどして発症する傷害の総称である．熱中症が疑われる症状は，めまい，頭痛，吐き気，嘔吐，痙攣，大量の発汗である．

本研究は熱中症を経験した，小学生・中学生・高校生を対象に，学校現場における熱中症発症の割合と状況や対策・対処法の理解度を把握し，学校現場で活用するべくアンケート調査を行うことを目的とした．

2. 研究方法

対象は，京都市内の小学 3 年・中学 2 年・高校 2 年合わせて 6 校の 1294 人である．

1294 人を対象にアンケート調査を実施した．

3. 結果と考察

熱中症に一回なったことがある小学校・高校は 3～５％を占めているのに対し，中学校は約 3%と少なめの結果が出た．数回なったことがある中学生・高校生では約 2 割を占めているのに対し，小学校では 1 割にも達していなかった．

5 月ぐらいから熱中症が発症し，7 月（34.6%）・8 月（63.4%）がピークでその後徐々に減っている．

学校現場では，屋内と屋外での部活動中は気温なども高いこともあり，熱中症になる割合が高くなっている．

熱中症になった時，最も多かった症状はめまい，頭痛，吐き気であり，ほとんどの生徒は症状が軽かった．

学校現場において，対策をしている人（18.9%）は少なく，対策をしていない人（31.4%）やどちらともいえない（49.7%）と回答した人が，非常に多い結果となった．

水分・塩分を補給する人が非常に多く最も身近でやりやすい対策であった．

熱中症に対しての対策を考えている人（67.4%）が多く，対策を考えていない人（32.6%）が少ないという結果が出た．

4. 結論

京都市内の学校現場での熱中症についてアンケート調査を行ったところ，救急搬送こそされていないものの，熱中症になったことがある児童生徒は約 4 割．そして熱中症に数回なったことがあると回答した生徒は約 2 割，そのうちのほとんどが運動中であった．

熱中症になったことがある生徒でも，熱中症対策はほとんどしていないという結果が出ている．その理由としては，熱中症に対してあまり危機感を持って考えていないということがある．またどのような対策をすればいいかわからないという回答もあった．また行っている対策として一番多いのは水分・塩分補給であった．

また，今後，熱中症対策をしていこうと思っている児童生徒が多いことが確認できた．

熱中症に対する認識がまだあまりされていないため学校現場に熱中症についての知識を広げていくことが必要である．

引用・参考文献

1）国立環境省（2015）京都市熱中症患者速報

2）総務省消防庁（2015）熱中症による救急搬送状況